

北九州市立大学
文学部紀要

第88号

【翻刻】『博多百韻』（北九州市立図書館蔵『連歌集』（仮）のうち）
渡瀬淳子……………80

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2018

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 88 March 2018

Document introduction: A reprint of “Hakata Hyakuin”

Junko WATASE80

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2018

【翻刻】『博多百韻』（北九州市立図書館蔵『連歌集』（仮）のうち）

渡瀬淳子

北九州市立中央図書館蔵『連歌集』（仮）について

本書は一四種類の連歌を集め綴じたものであるが、『西山宗因独吟千句』などと合綴されており、独立した本であることが分からなくなってしまうていた。題簽もなく適切な名称がわからなかったため、今、仮に『連歌集』と呼んでおく。

書誌は次の通り。

縦11.9cm×横19.7cm、本紙共紙表紙四ツ目袋綴、題簽なし。墨付六四丁、遊紙は後ろに一丁ある。一面一四行。各連歌の発句を抜き書きした目録がある。江戸の中期から後期にかけての書写と見られる。

目録は次の通り

あらぬ名をかるや天ひこ時鳥	宗祇
山柴に夕日戦めく時雨かな	宗養
空に出て見ん世や幾世秋の月	肖柏
猶たのめ行衛もさそな秋の菊	昌程
かきはらひ宵中の月を御池哉	平松中納言
霜朝 <small>注アリ</small> の舟 <small>くまひ</small> はち、む日影かな	了意

秋更ぬ松の博多の沖津風	宗祇
富士 <small>独吟</small> の根も年ハ越ける霞哉	〃
朝霞おほふやめくみつくは山	〃
水草 <small>三吟</small> を夏の花なる川邊哉	冬康
くめ <small>独吟</small> は澄くまぬやにこる石清水	紹巴
処さへ玉しく芝のみきわかな	御製
あらし瀬のミあハと成し一葉哉	昌琢
行水 <small>独吟</small> の氷はかねのひらきかな	道徹

今回は宗祇の連歌の中でもあまり知られていない『博多百韻』（秋更ぬ松の博多の沖津風）を翻刻紹介することとした。これは宗祇の『筑紫道記』に書かれた文明十二年の旅で博多の龍宮寺（現博多区冷泉町）に滞在し、同年九月二十八日に行った連歌の興行である*1。原本は享保十七年六月の火災で消失してしまし現存しない*2。ことから、貴重な資料と言えるだろう。宗祇はこの旅に「宗観」「宗賀」という弟子を連れていたことが分かるが、「宗観」が後の宗長で、この時「宗観」と名乗っ

ていたことなどが分かり興味深い*3。

*1 『筑紫道記』（群書類従）によると、二十四日から三日間にわたって千句連歌を興行し、二十七日は雨のため博多に逗留、その際「やどりの院主一折とあやにく侍れば。又の日。」とあって「秋ふけぬ松の博多の興津風」と発句が記してあることから、二十八日の興行と思われる。

*2 三原恕平・田坂大蔵『筑前福岡区地誌』（文献出版 一九八〇年）の「上小山町」の項に「宗祇法師が筑紫紀行に博多と云うにつきぬやどりは龍宮寺と云える浄土門の寺なり。享保十七年六月十六日の夜、当寺炎上して、冷泉中納言筆の額及び宗祇が連歌百韻の一本も烏有となれり。惜しむべし。」とあるのによった。

*3 宗長の初名は「宗歆」とするのが一般的だが、「宗観」とも書いたらしい（『伊地知鐵男著作集Ⅰ 宗祇』等による）。山崎藤四郎『石城遺聞』（三養堂 明治二三年刊）上巻「宗祇法師博多百韻連歌之事」ではこの百韻をすべて翻刻紹介しているが、こちらでは「宗歆」となっている。最近では、秋定弥生「宗祇と宗観」（『武庫川国文』八一号 武庫川女子大学国文学会 二〇一六年一〇月）に、宗長と宗観（宗歆）は別人であるという説が提出されており、秋定は宗観を三富豊前守藤原忠胤であるとしている。研究の進展を俟ちたい。

博多百韻

宗祇筑前博多下向之時同所於龍宮寺興行

賦何木連歌

- | | |
|-------------------|----|
| 1 秋更ぬ松のはかたの沖津波 | 宗祇 |
| 2 霧に時雨る波の寒けさ | 空吟 |
| 3 月さそふ夜舟の上に雁鳴て | 弘担 |
| 4 夢に旅ゆく床の暁 | 朝酉 |
| 5 古郷は遠くなるとも忘れや | 英誉 |
| 6 山はいつも夕暮の春 | 岸孝 |
| 7 そことなき鐘や霞て残るらん | 宗観 |
| 8 嵐の今は暮そ長閑けき | 宗賀 |
| 9 分て見む遠の梢の花盛 | 良本 |
| 10 松より奥の明はつる空 | 永賀 |
| 11 野への雪冴る方にや降ぬらん | 昭阿 |
| 12 山遠き江は水も氷らす | 祇 |
| 13 船よはふ川瀬は波もしつかにて | 吟 |
| 14 雲に声する鳥の一つれ | 担 |
| 15 子規待は難面暮つかた | 孝 |
| 16 夜になる月の影そほのめく | 西 |
| 17 下萩の風の末葉に露見えて | 祇 |

- 18 霧立のほる山里の道
 19 谷隠水は音して人もなし
 20 朽たる橋はいつ渡しけん
 21 名は今も昔ながらの跡とめて
 22 たのめはかはる世とも思はず
 23 あはぬ間もよしや見えつる心さし
 24 忘れむ物か独ねの夢
 25 心まよふ宇津の山辺のかり枕
 26 夕霜さむみ月そまたる、
 27 虫の音も草も枯行陰にきて
 28 古郷とへはた、秋の風
 29 冷しき比こそ空も哀なれ
 30 入日のかけや人の世の中
 31 幾度か憂身斗に思ふらん
 32 悔しやかゝる恋の山道
 33 消かへる雲も思ひの色なれや
 34 泪にむかふ暮は悲しき
 35 朝朗（あさほらけ） 都を花に旅立て
 36 いかなる宿の春をとほまし
 37 鶯の出初る野の霞む日に
 38 見えぬ声をそ風に聞ぬる
 39 片敷の袂涼しき秋の来て
 40 陰は露けきしの、めの山
- 観 賀 阿 観 賀 西 祇 本 賀 西 祇 観 担 観 祇 担 観 賀 孝 阿 祇 吟 西 賀 孝 阿 祇 担 観 祇 担 観 賀 西 祇 本
- 41 霧晴て尾上の月や残るらん
 42 帰る男鹿の鳴音さひしも
 43 あらはなるかり庵に人のかけはして
 44 今朝ふく風に夢は覚けり
 45 雲やしる夕の雨は跡もなし
 46 むなしかたみの面影の空
 47 問はずして後は幾日を送るらん
 48 存命（なごち）へむとは身を思ひきや
 49 うたかたもまた消ぬまの老の波
 50 あはてそ法の道は悔しき
 51 行ちかふ舟もはかなき磯傳ひ
 52 あらかな吹そおろす山風
 53 有明の残れる月に散紅葉
 54 うつろふ菊に霜まよふ空
 55 跡遠き水無瀬の色（ま）の秋もなし
 56 身にしむ色は夕也けり
 57 幽（かすむ）なる烟に今日も鐘なりて
 58 行衛思へは定なの世や
 59 幾夜我野に臥山にあかすらん
 60 家路もしらし花の咲比
 61 霞む也遠き帰さを心せよ
 62 友待つれぬ春の雁かね
 63 契しはこなたかなたに成はて、
- 本 吟 担 阿 祇 担 孝 担 祇 阿 祇 担 孝 担 祇 担 観 賀 西 祇 担 観 賀 西 祇 本

【翻刻】『博多百韻』（北九州市立図書館蔵『連歌集』（仮）のうち）

英 譽 五	朝 西	<small>住吉座司一族也</small>
	十二	
永 賀 二	良 本 四	

